



TITLE:

同好會成立の由來

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 同好會成立の由來. 天界 1920, 1(1): 14-16

ISSUE DATE:

1920-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159508>

RIGHT:



同好會成立の由來

我々、天文學を研究してゐる者が、それ／＼又、天文の好きな友人を幾人かづゝ有つてゐるといふことなど、一日、話し合つたことがあつた。更に又、別の日に、『世には天文學に熱心な人がかくれてゐるらしい、そして適當な書物や、器械や、同趣味の友達が無いため、始終不満足勝ちでゐられるだろう、御互ひのためだ、何か考へて、都合な形を作つて見たいものだ』と、語り合つたこともあつた。最近に又、英米あたりの星好きな連中が——本職の天文學者も、片手間の素人も、一所で——何々會を作つて、相互の趣味向上のためにも、學界へ貢獻のためにも、すいぶん立派な成績を擧げてゐるのを、新着雜誌などで見て、羨しく思つたこともあつた。

こんな事情が重なつて、吾々も一つの會を起し、前述べたやうな事柄を一步進めて實現して見たいと思ひ付いたのが、同好會の抑もの始まりである。會

は會員組織にして、相互の親睦と向上を目的としやう、就ては餘り階級を設けないで、時節柄、デモクラシーで行かうじやないかと、略々相談が纏つて大急ぎに、趣意書を發表したのが九月の始めであつた。

果して、あちらからも、こちらからも、反響があつて、入會希望の手紙が、毎日々々、十通二十通と届く。忽ち百名を越え、百五十名を越え、——此の分では九月中に二百名を突破しやうな見當が付く。

そしてこんなに澤山集つて來る手紙の中には、大抵は、單なる物好きからでは無く、すいぶん熱心と苦心とで勉強もし、研究もしてゐられ、『是非々々入會したい』といつたやうなのが多いので、我々發起人としては、新發見でもしたやうに嬉しかつた。

最早大丈夫と見て、遂に九月二十五日發會とするときめた。

いよいよ發會の日には、あゝもしやう、こうもしやうと、先き走つたことを考へた人もあつたが、又考へ直して、始めから餘り調子に乗り過ぎないやうにと注意する諸君もあつて、兎に角、當日は新城博

士の御奨勵と、百濟君の御講演とを御願ひするとし
た。

九月二十五日、其の日は空模様が少し氣遣はれた
が、定刻三時には席が殆んど塞がつて了つた。

先づ自分が發起人側から御挨拶に立ち、次いで古
川君に假規則を朗讀して頂いて、來會諸氏に御相談
申し上げ、二三質問などがあつていよく會は成立
規則公認といふことにきまつた。

それから新城博士が

『天文學の使命』

といふ題で、一同に御話し下さる主意は

天文學は、他の學問の例に漏れず、其の始めの目的は利用厚生で
あつた。即ち人文開化の初期として農業時代には、耕作の時期が
太陽熱の都合によつて左右せられるから、自然人間は太陽の運行
によつて曆を作るやうに力めた。次の商業時代には通商航海の必
要上、天文學は航海者のために貴重なる武器であつた。最近の工
業時代は動力が最も貴重なる資本と考へられるのであるが、今ま
で盛んに動力として使はれた石炭は將來の壽命が餘り長くないと
見做られてゐる。今後は、石炭を捨て、太陽のエネルギーを動
力に用ゐるやうに研究を進められなければならぬ。こゝに將來の
天文學の目標がある。

近頃の天文學は、右に言つたやうな、直接に人生のための應用
として見られる外に、純粹に、學問のための學問としても大進歩
をしてゐる。殊に天文學が天體個々の物理的研究を開拓するやう

になつて以來、一方に、天體の進化や宇宙の構造の方面に目覺し
しい發展を遂げてゐると同時に、他方に新しい物理學のために
多くの問題と解決とを提供してゐるのは忘れてはならぬ。

しかしながら、昔から諺にもある如く吾々は單なる學問、さい
ふ術よりも、むしろ道の貴きを思はねばならぬ。我々が天文を研
究して悟ることは、吾人人間の小さなに對して、宇宙が如何に大
なるかといふ事である。しかし此の宇宙には秘密がない。我々
が眞に虚心であれば、何時誰人にも此の宇宙の眞理は開かれ
てゐるのである。之れは、たゞひ小なりと雖も、吾人の享受し得
る特權として、天に感謝しなければならぬ。

更に又思ふ、天文は實に天の文、即ち天の文學である。吾人は
此の天文學を味ふことによつて、趣味の向上と精神の陶冶とを成
就することが出来るならば吾人の幸福は眞に此の上なしと言はれ
ばならぬ云々

次に少憩の後、百濟理學士は

『太陽系の擴張』

と題し、先づ太陽系の構造を略述して後、主に海王
星外の未知遊星について、最近諸學者の研究を講演
せられた。問題は頗る精細綿密なる理論的のものな
るに拘らず、理學士は種々の圖表等によつて平易親
切に述べられたので、來會者一同は時の移るのを忘
れた。此の講演の主意はこゝに記載する餘白のない
のを残念に思ふ。

最後に、自分は附録として、丁度此の日入手した

外國通信により、白鳥座新星の發見事情を簡單に報告し、五時會を閉ぢた。此の日、鹽田君は會の進行中、寫眞を撮影せられたのは感謝に堪へない。

發會は無事に濟んだ。其の後も尙、入會の申込は續々と届いてゐる。會費も或は半年分、或は一年分と、ごし／＼送られる。既に名譽會員が二人も出來た。(一九二〇・二〇・二五。山本一清記)

會則による會の役員は左の通り決定した。(今度だけは全部發起人會で決定。次期からは會則によつて選舉とする)

第一期幹部

幹事	山本一清氏
同會計	古川龍城氏
講演掛	川崎俊一氏
編輯掛	古川龍城氏
觀測掛	海老恒治氏
寫眞掛	鹽田菊太郎氏

諸掛りは左の通り幹部から囑託した

事務室より

會は創立趣意書起草後五十日にして三百名の會員を得ました、喜ばしい事です。東は東京や長野から西は支那に至るまで擴がつてゐます。しかし會の事業を安全にやつて行くためには是非五百名にする必要があります、今二百名の熱心家を得るため奮闘をしませう。幹部では近日中に大阪、神戸、岡山、名古屋あたりへ先づ天文の宣傳旅行をする計畫をしてゐます。右の地方の會員諸君の御援助を願ひます。

會費は振替貯金(大阪第五六七六五番)によつて御送り下さい。

天文同好會規則 (第三版)

第一條 此ノ會ヲ天文同好會ト云フ

第二條 此ノ會ハ天文學ノ了解ヲ進ミ兼ネテ同好其相互ノ親睦ヲ増スノガ目的デアル

第三條 事務所ヲ京都市吉田町京都大學天文臺内ニ置ク。又會員密集ノ地ニハ支部ヲ置ク事ガアル

第四條 此ノ會ハ右ノ目的ヲ達スル爲メ次ノ事業ヲ行フ

一、講演(例會一回 大會年一回 其他臨時會)

二、講習會(各地テ臨時ニ開ク)

三、雜誌圖書ノ出版(雜誌ハ月一回、圖書ハ隨時)

四、實地觀測(第一部、啓發的、甲觀望、乙見學、第二部、研究的、甲流星、乙變光星、丙彗星)

第五條 此ノ會ノ目的ニ賛同スル者ハ誰デモ會員ニナレル

但シ毎月金貳拾錢ノ割テ納付スル必要ガアル

申込ノ際ハ住所職業生年ヲ記入セラレタイ

第六條 特ニ一時金五拾圓以上ヲ寄附スル者ヲ名譽會員トスル

第七條 此ノ會ノ幹部ハ次ノ通り

幹事 二名 會計 一名

此ノ幹部ハ總會テ選舉セラレル者デ任期ハ一個年

第八條 幹部ハ會員ノ中カラ次ノ係リヲ指名囑託スル

講演係 一名 編輯係 三名 觀測係 一名 寫眞係 一名